決断の時・知られざる外交官の舞台 第2回

中南米との文化外交に尽力した 堀口九萬一

駐ブラジル公使

外交史家・法学博士 松村正義

【ほりぐち・くまいち（1865～1945）とその時代】1894年8月日清戦争、9月初の外交官領事官試験。1895年4月下関講和条約、10月閔妃事件。1899年堀口、ブラジル赴任。1904年日露戦争。1908年第1回ブラジル移民船。1913年メキシコで軍事クーデター。1918年堀口、駐ブラジル特命全権公使。1920年国際連盟発足。1922年ブラジル独立百年祭。1933年日本、国際連盟脱退。1935年堀口、文化使節として中南米へ。

（写真・外務省外交史料館所蔵）

近代国家を目指す日本にとって、大きな分岐点となった日露戦争。「バルチック艦隊撃破」という歴史的勝利の陰には、日本から遠く離れた中南米での日本人外交官の活躍があった。7年もの長きにわたり中南米で外交官を務め、退官後も文化外交に尽くした堀口九萬一である。

閔妃事件への連座

1910年の日韓併合から100年目を迎えた今年。新たな時代を共に歩みはじめた日本と韓国だが、日韓併合に先立つ1895年に起きた「閔妃（びんひ）事件」について知っている日本人は少ないかもしれない。

日清戦争終結から半年後の10月8日深夜、事件は起こった。約50名の日本人の一団が京城（ソウル）の王宮・

景福宮に押し入り、李王朝第26代国王・高宗の皇后・閔妃を殺害したのである。その関係者の中に、駐韓国公使館の領事官補として赴任してきたばかりの堀口九萬一がいた。

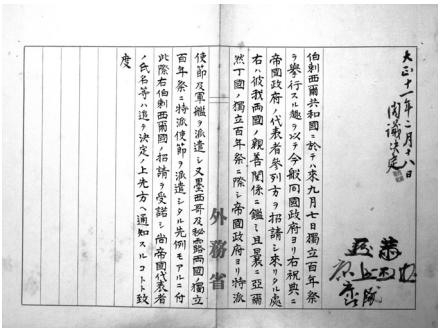
日本は当時、同年4月17日に締結した下関講和条約で、清国に韓国独立を認めさせ、遼東半島および台湾・澎湖諸島を譲渡させたほか、多額の賠償金を得た。しかし1週間も経たずして、露独仏3国からの強圧的な干渉により遼東半島を清国へ返還せざるを得なくなっていた。その結果、韓国の宮廷では、国王の父・大院君が率いる親日派の勢威が衰退し、閔妃を中心とした親ロシア派の勢力が急速に増大していく。この情勢の急変に強い危機感を抱いたのが、駐韓公使・三浦梧楼（ごろう）と公使館書記官・杉村 濬（ふかし）である。2人は、同年9月のある日、堀口を呼び、離宮に幽閉されている親日派の大院君に秘かに面会して再起を促すよう要請した。

当時の韓国宮廷では、会話は必ず立ち聞きされ、すぐに話の内容が漏れてしまう状況にあり、筆談が上策とされていた。しかし韓国語ができなかった堀口は、一計を案ずる。厳重な監視の中を潜り抜けて大院君と密会した堀口は、再起を促す日本側の計画について、得意とする漢詩を通じた筆談で伝えたのである。後に、この時のことを「長い外交官生活でたった一度だけ経験した『無言の問答』劇だった」と述懐している。

それから約1カ月後、韓国内外を震撼させた「閔妃事件」が発生し、堀口は国際的重大事件に関与したとして一時非職となる。しかし翌年の広島裁判で無罪とされ、同年2月には外務省に復職。以後、長期にわたりブラジルに在勤することになる。

初の外交官領事官試験合格者

1865年1月、新潟県古志郡長岡町（現・長岡市）に生まれた堀口は、東京帝国大学法科大学を卒業後、司法省に在籍したが、1894年9月に実施された初の外交官領事官試験に合格し、韓国・仁川、京城に赴任。閔妃事件後、外務省に復帰した堀口は、まず中国・沙市在勤を命ぜられる。次いで外交官補としてオランダに赴任した後、1899年11月に初めてブラジルの地を踏む。堀口にとってはこの転勤が、その後のブラジルをはじめとする中南米諸国との縁故を生むきっかけとなった。事実、1918年7月に特命全権公使として再びブラジルに赴任し、駐在するこ


大正十一年二月八日
閣議決定
伯剌西爾共和國ニ於テ來ル九月七日獨立百年祭ヲ擧行スル趣ヲ以テ今般同國政府ヨリ右祝典ニ帝國政府ノ代表者參列方ヲ招請シ來リタル處右ハ彼我兩國ノ親善關係ニ鑑ミ且曩ニ亞爾然丁國ノ獨立百年祭ニ際シ帝國政府ヨリ特派使節及軍艦ヲ派遣シ又墨西哥及秘露兩國ノ獨立百年祭ニ特派使節ヲ派遣シタル先例モアルニ付此際右伯剌西爾國ノ招請ヲ受諾シ尚帝國代表者ノ氏名等ハ追テ決定ノ上先方ニ通知スルコトト致度
外務省

1922年、ブラジル独立百年祭に際し、特派大使派遣が閣議決定された書類。堀口駐ブラジル公使がその特派大使に任命された（史料・外務省外交史料館所蔵）

と延べ7年間にも及んだ。

この間、堀口が日本とは大きく異なるブラジルの生活や文化について見聞を広めるようになったことは言うまでもない。アマゾンという地名の由来、特有の食べ物や動物、南半球ならではのクリスマス風景……。尽きることない堀口の好奇心は、その後の執筆活動からも伺える。

一刻を争う外交で軍艦を獲得し、日露戦争の日本海海戦に貢献

中南米における堀口の事蹟は、文化的貢献だけにとどまらない。

日露戦争開戦直前の1903年12月20日、小村寿太郎外相から在ブラジル公使館の臨時代理公使であった堀口の許に、一通の暗号電報が届く。当時、同公使館は南接するアルゼンチンも兼轄しており、暗号電報には、こう記されていた。

「アルゼンチンの2隻の軍艦がイタリアのゼノアで建造中。ロシア政府は、それをアルゼンチンから買い受けたいとして交渉中なるも、代金の支払い方法で意見が一致せず、交渉は停滞中と伝えられる。貴官は、直ちにアルゼンチンへ急行し、日本へ譲り渡すよう交渉ありたい」

この報を受け、堀口はすぐにリオデジャネイロを発つ。5日後の25日にブエノスアイレスに到着するが、クリスマスでどの官庁も休暇である。しかし堀口は、無理を承知で同国の外務大臣や海軍大臣へ連絡を取り続けて面会し、遂に軍艦2隻の日本への譲渡の約束を取り付けていった。まさに、一刻を争う国運を賭した外交交渉であり、それを成し遂げた時の昂揚した気持ちたるや察すべきであろう。この両艦は「日進」「春日」と命名され、日露戦争の命運を分けたとも言われる日本海海戦に参戦し、「バルチック艦隊壊滅」に貢献した。

また、2度目のブラジル駐在以前の1913年、臨時代理公使として赴任中だったメキシコでは、軍事クーデターに遭遇する。この時、殺害されたフランシスコ・マデロ大統領の遺

族の求めに応じ、日本公使館に彼らを保護した堀口は、革命軍に対して毅然として日本の武士道を説き、遺族の安全を保証させたという。

堀口は、1925年、駐ルーマニア公使を最後に外務省を退官するが、その後は中南米への日本の文化使節という大きな使命が待っていた。

初の文化使節として再び中南米へ

第一次世界大戦後の1920年、平和維持のため国際連盟が発足し、その中に知的協力国際委員会が設けられると、世界の主要国では自国の文化を海外へ積極的に紹介しようとする動きが出てきた。フランスの対外文化機関であるアリアンス・フランセーズの拡充をはじめ、ドイツのゲーテ・インスティトゥート、イギリスのブリティッシュ・カウンシル創設などがそれである。

日本でもそうした状勢を背景に、1933年の国際連盟脱退で生じた政治的な国際的孤立化を文化的に回避しようと、翌年、㈶国際文化振興会（現・国際交流基金の前身）を設立する。その文化事業の一環として、1935年、中南米事情に通暁した堀口が文化使節として同地域へ派遣されることとなる。5月に東京を発った堀口は、ブエノスアイレス、モンテビデオ、リオデジャネイロ、メキシコ・シティを歴訪し、11月に日本に帰国。実に半年間にも及ぶ中南米大陸の文化的巡訪であった。

当時、中南米では盛んに講演会が行われており、堀口も講演を第一の宣伝活動とし、日本の近代化から軍国主義と武士道、腹切りと人道主義、新芸術と詩歌といった聴衆からの多岐多彩な質問にも積極的に答えた。それは、口も立てば筆も立った博学多識の堀口だったからこそ、可能だったのかも知れない。堀口は、終戦直後の1945年10月31日に死去するが、その才能は、長男である詩人の堀口大学に受け継がれている。

【参考文献】堀口九萬一『遊心録』（第一書房）／同『南米及び西班牙』（平凡社）／同「関妃事件の思い出」（軍事史学会『軍事史研究』）／同『外交と文芸』（第一書房）／角田房子『関妃暗殺』（新潮社）／財団法人国際文化振興会『昭和十年度事業報告書』／外務大臣官房人事課『外務省年鑑』／松村正義『新版　国際交流史』（地人館）

松村正義　まつむらまさよし
1928年福井県生まれ。東京大学法学部卒。1952年外務省入省。1970年ニューヨーク領事。1975年国際交流基金勤務。1979年法学博士。1985年コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。1988年帝京大学教授。2003年日露戦争研究会会長。主な著書に『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究―』（新有堂）、『ポーツマスへの道―末松謙澄とヨーロッパの黄禍論―』（原書房）、『新版　国際交流史―近現代日本の広報文化外交と民間交流―』（地人館）、『日露戦争100年―新しい発見を求めて―』（成文社）他、論文も多数。

外務省外交史料館
〒106-0041 東京都港区麻布台1-5-3
TEL：03-3585-4511
http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/